

東京物理学校の思い出

6

1 東京物理学校入学

入学は昭和18年4月、入学式などはありませんでした。東京物理学校は長年にわたる無試験入学の伝統がありましたから、1年生は昼間(午前と午後)が2000人くらい、夜間が1000人くらいだったと思います。理工系の専門学校で著名なのは物理学校だけだった事情も手伝ったことと思います。

科目は基礎学科のみで、先生は芥(解析幾何)、関(高等代数)、坂入(微分積分)などの、いずれもベテランの方ばかりでした。他に物理、化学の講義もありました。途中で関先生が、ただいま召集を受けたと挨拶されたのには驚きました。むろん講義はそれで終わりです。教室の中は声なしでした。何という勿体ない話だと思いました。

当時は大東亜戦争は中だるみ状態で、戦局がそう厳しくなかったために、いわゆる理工系学徒の徴兵猶予制度が維持されておりました。物理学校の生徒も然りです。私自身も昭和19年に徴兵検査自体は受けましたが、兵役には服しませんでした。昭和20年10月に座間の陸軍士官学校入隊ということは決まっておりましたが、すでに軍隊は解散しつつある時代になってしまいました。

2 東京物理学校2～3年生(応物)

昭和18年当時は未だ神楽坂の白十字で無糖コーヒーを飲むくらいの生活ができましたが、2年生になって級友200人余りの応用物理学科と決まったとたんに6月から勤労働員です。ただし、勤労働員中も週1日は休んで学校へ出て授業を受けることになり、そこで級友と相まみえて応物生らしくなっていました。また軍事教練があったのも級友との絆を強める上で役立ちました。

当時の応物の先生は東大工学部の真島正市(科長)、菅義夫、神山雅英、筒井俊正(計測工学科)、



内田 功

昭和20年9月応物卒

福田節雄(電気工学科)のほか、理研の黒田正夫、東工大の川下研介、早稲田の沖巖の諸先生でした。今にして思えば、こうした先生方の講義を受けただけでも幸せでしたけれど、時間そのものが小間切れのために、いつ3年生になったのか分からぬままに進級してしまいました。後で知ったことですが、当時の学籍簿には2年次は「動員成績」という文字のみがゴム印で押されています。学科試験などなかったのですから点数なしというわけです。

真島先生の講義のテーマは応用物理学実験で、並行して行われた物理実験そのものを補完する意味もありました。物理実験は軍隊式で、その事前と事後に実験室内で整列して点呼が取られました。気合を入れて実験をやるという効果があったと思います。

3 物理学校卒業前3か月

勤労働員は6月でやめ、7月から学校に戻りました。卒業前の3か月くらいは授業を受けさせる必要があるためです。授業内容は機械科もどきで、科目は結構ありましたが、材料力学以外は覚えていません。それも教科書なしの授業ですから、力学の計算式なども頼れるものは自分のノートのみという不安を禁じ得ない状況でした。他には佐々木六郎先生の設計製図がありました。堂々たる体躯の方で、その科目たる内燃機関のような圧力ある講義だったことが印象に残っています。

4 昭和20年8月15日

敗戦は学校で迎えました。3年次のみが学校へ戻っていたからです。中庭の階段の上にラジオを持ち出し、配属将校の陸軍大佐の訓示のあと、いわゆる玉音放送を聞きました。何やら分かりませんでした。どうも日本は負けたいらしいということだけは理解できました。皆ざわざわしただけで自然解散になりました。学校当局もどうしてよいか分からず、とりあえず翌16日から8月末までを夏休みにすると発表して、その場を取り繕ったような始末です。日本は今後どうなるのか分からない、もう学校へ行っても仕方がないと思いましたが、さりとて自宅で遊んでいても仕様がなにも思いません。そこで、この夏休み明けには学校へ行き、3年次の試験を受けました。これが事実上の卒業試験でした。

5 昭和20年9月の卒業式

卒業式は理研の所長だった大河内正敏校長が出席されました。私はこの卒業式には出席せず裏手の小部屋で国歌斉唱の伴奏レコードの係りをしていました。実をいうと私は卒業すること自体ができなかったのです。9月の試験の2日目が台風による事故で総武線が不通になってしまい試験が受けられなかったためです。結局10月に追試験を受けて無事に卒業しましたが、たった2年半の学校生活は短いようだけれども非常に長かったという感じ。卒業証書はガリ版刷りのワラ半紙でしたが、翌年に改めて厚紙の卒業証書が送られてきました。

6 神奈川科学技術アカデミー

戦後、私は昭和28年に出来たジャパックスという放電加工機メーカーに入りました。同社は池貝鉄工の子会社でしたが、その池貝鉄工が潰れてしまったために、溝の口工場跡の広大な敷地の利用方法の問題が出てきました。そこで各自治体の援助による民活法適用第1号に認定された、かながわサイエンスパークというインキュベーター施設を作ることになりました。社長は岡崎嘉平太、副

社長は井上潔・飛鳥章の各氏でした。

しかし、入居を期待していた研究開発会社が入らず、神奈川県長洲一二知事と東工大の斎藤進六学長が相談して、同学長を理事長とする、神奈川科学技術アカデミーという大学の研究機関のようなものを作って、当該施設の大半を埋めることにしました。

その後、斎藤理事長は長岡技術科学大学の学長になられたため、理科大の藤嶋昭学長が、その後を継いで第二代の理事長を務められました。

7 新超電導材料研究会の設立

斎藤進六先生とは公私ともに関係がありました。公の面では、科学技術庁傘下の新超電導材料研究会の設立で、同先生を会長として折からの世界的な超伝導ブームに対抗しました。私の面では、縄文中期の土器や土偶の研究です。長岡の馬高遺跡から出た火炎土器や遮光器土偶については、いささかの知見も公表し、また、つくば科学万博の松下館には当該モデルを出品しました。いずれも斎藤先生の指導によるものです。

8 健康法としての自転車

特に健康法を意識したわけではありませんが、長年タンデム(二人乗り自転車)に乗ってきたことが結果として健康法につながっているようです。今も日課として毎日1時間ほど走っています。

